



活動報告

カワウ広域管理対策講座

加藤 ななえ

1. カワウの被害と管理

環境省から「特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル(カワウ編)」が出てから5年になります。カワウの被害がマスコミに露出する事は、一時ほどは多くはなくなってきましたが、依然として深刻な問題であり続けています。崖の崩落までが危惧される竹生島の樹林の枯死や、アユなどの漁業権魚種をカワウが捕食することによる遊漁券の売り上げの減少に伴う内水面漁協の減収などです。



写真1. 巣の上のカワウのペア。
[Photo by 石川一樹]

被害の起きている現場では手法を工夫しながら対策に取り組まれています。目に見えて被害が減少したという話は耳にしません。この背景には、カワウと魚の生態や環境の変化についての理解の不足と、関係者間の協力体制が十分でないということが挙げられます。被害者はカワウ＝「害鳥」を駆除することだけが問題解決の方策であるという考えに陥りがちです。また、自然保護の立場で関わる人の中には被害の明確なデータや先の見通しもないままにカワウが駆除され続けることに対して不信を抱く人もいます。そして行政は、担当者はシカやサル被害なども担当しており、任期も2、3年と短く、関係者間の協力体制を構築するところまで手が回らないことも多いのです。

2. カワウの広域管理

バードリサーチでは、これまでに関東のカワウの個体数の調査や標識調査、衛星追跡などの調査に携わってきましたが、関係者や関係機関を繋ぐ仕事を担う必要と責任も感じ、2007年度より関東広域協議会の事務局を請けて関係者間の協力体制の確立に努めて来ました。広域を視野に入れた体制としては、10都県が参加している関東カワウ広域協議会と、15府県が参加している中部近畿カワウ広域協議会の二つがあり、それぞれ指針を策定しています。関東では、「個体数のモニタリング」や「一斉追い払い対策」のデータの共有が行われ、これら3年分のデータの蓄積からカワウの生息状況と追い払い対策の効果の傾向がようやく

見えるようになってきました。しかし、中部近畿では、カワウの被害に対する認識の違いが府県間で大きく、モニタリング調査のデータ共有のほかは、広域的一体的な対策までは踏み込めないでいます。

3. 広域管理対策講座

そこで、近畿地方での広域的な取り組みを少しでも前進させるために、2008年の10月と11月に、「カワウ広域管理対策講座」の企画と講師を務めてきましたので報告します。この講座は、カワウの広域管理に関する普及と関係者間の情報共有を推進する目的で、近畿地方事務所と開催県との共同の主催で開かれました。県の担当者からは、具体的な対策事例を話してほしいという希望が多かったのですが、基本を抑えなければ良い対策につながらないと考え、講義内容を組み立てました。1)生態、2)個体数と分布の変化、3)被害の発生状況、4)各地の対策紹介、5)広域協議会の取り組み、6)管理の考え方です。兵庫県では、県立人と自然の博物館研究員の遠藤菜緒子さんが「兵庫県のカワウの状況」の発表をしてくださりましたが、そのほかの県については私のほうで情報を収集して講座に組み入れました。

10月15日の和歌山市での講座には県や市町村の行政担当者と漁協と猟友会の方の38名が、10月27日の兵庫県神戸市での講座には行政と漁協のほか自然保護団体の方の参加



写真2. 兵庫県での講座の様子。

もあり46名が、滋賀県大津市では行政関係者のみで23名の参加がありました。講座の後には、長めの質疑応答時間をとるようにプログラムを設定しました。「いかにしたら効率的にカワウを駆除できるか」「カワウの増加要因はなにか」「自分の河川に飛来するカワウがどこから来るのか」「“防除”と“駆除”はどのように考えるべきなのか」「全国に何羽のカワウがいるのか」などの質問が出ました。講座の終了後には、「カワウって奴がようやくわかった感じがしてきたよ」と漁協の方から、「管理の考え方が今後の参考になった」と行政の方から声をかけられ、講座が人にもカワウにも少しは役に立ったかもしれないとほっとしました。

協議会や講座を通して、異なる立場や意見の人たちと「顔を見て話し合う」ことが大切だと改めて感じるようになりました。今後は講座形式だけではなく、関係者が意見を言える場を設け、十分に議論ができるワークショップのような企画を進められたらと考えています。

活動報告

ガンカモ調査集会&研究集会
in 伊豆沼

神山 和夫

12月13日に宮城県栗原市の伊豆沼・内沼サンクチュアリセンターで、ガンカモ類をテーマにした研究集会を開催しました。時まさに伊豆沼・内沼には5万羽を超えるマガンが集まっており、集会には絶好のシーズンでした。

1. 集会での発表内容

今回の集会ではガンカモの調査と地域の環境保護活動を絡めた発表が多く、会場にお越しいただいた方々も民間や行政で環境保護活動に関わっている方が多かったようです。どの発表もおもしろかったのですが、いくつかピックアップしてご紹介しましょう。

衛星追跡にもとづく陸ガモ類3種の春の渡り経路と移動パターン。平岡恵美子ほか

東京大学の平岡恵美子さんが発表されたカモ類の衛星追跡では、春の渡りでオナガガモが日本列島沿いに北上するのに対して、マガモとヒドリガモは日本海を越えて渡るルートも存在するという事を教えていただきました。もし秋の渡りがこの逆コースであれば、バードリサーチで行っているガンカモの初認調査ではオナガガモは北から順に初認が届くということが予想できます。今期スタートした初認調査でその傾向を捉えたかったのですが、残念ながらまだ報告件数が少なく細かい飛来パターンが分かりません。来年は飛来順序が分かるようにしたいので、ぜひ皆様の御協力をお願いいたします。

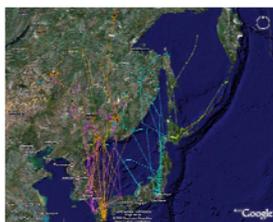


図. 春のマガモの渡り経路。

◆ガンカモ類の初認調査のページ

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/moni1000/gankamo/shonin.html

大山上池・下池ラムサール湿地登録地・都沢湿地
宮川道雄

尾浦の自然を守る会の宮川道雄さんからは、昨年秋にラムサールサイトに登録された山形県の上池・下池の保全活動についての紹介がありました。下池のそばの休耕田(都沢)にジグザグの水路を造り、下池から流れ出る水を自然浄化する施設を作ったところ、その場所の湿地環境がカモやクイナの仲間の生息地になったそうです。都沢は7haの小さな湿地ですが、それでも浅い水域を作ることで豊かな生物相ができあがるということが印象的でした。

2. マガンの飛び立ちと蕪栗沼・化女沼

翌14日の早朝はマガンの飛び立ち観察会にレーダーを持ち込んで、上昇していくマガンの軌跡をレーダーに映して見てみようと思いました。しかし、マガンの群はぐるぐる回る変なもの(レーダー)の上空をきれいに避けて飛んでいくので、この試みはあまりうまく行きませんでした。それでも、迫力あるマガンの飛び立ちと、遠くの水面に1羽だけいたハクガンを探して、皆さんには楽しんでいただけたようです。

そしてこの日はさらに、ラムサールサイトの蕪栗沼と化女沼を訪ねました。化女沼は前述の上池・下池とともに昨年秋にラムサールサイトに登録されたばかりの場所で、亜種ヒシクイの日本最大の越冬地になっています。化女沼はねぐらとして夜間に利用されているのですが、運よく近くの水田で亜種ヒシクイを見つけることができました。また蕪栗沼で泥だらけになってマコモの根っこを掘っているオオハクチョウには野生の迫力があり、餌付け場のオオハクチョウしか見馴れていなかった私には新鮮な光景でした。



写真. 蕪栗沼で解説を聞く。

最後になりますが、会場の便宜を図って下さった嶋田哲郎さん(伊豆沼・内沼環境保全財団)、エクスカージョンの案内をして下さった池内俊雄さん(雁の里親友の会)と鈴木耕平さん(蕪栗ぬまっこくらぶ)、そして集会にお越し下さったすべての皆様にお礼を申し上げます。

図書紹介

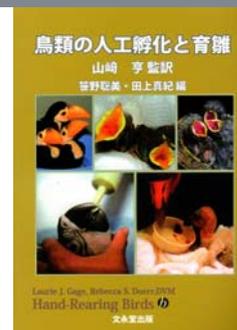
鳥類の人工孵化と育雛

山崎亨(監訳) 笹野聡美・田上真紀(編) / 文永堂出版 定価 12,000円(税別)

バードリサーチにも時折、傷病鳥や拾ったヒナをどう世話したらよいかといった問い合わせがあります。ぼくはブンチョウやウズラの飼育経験はありますが、傷病鳥の飼育経験はほとんどなく、なかなかちゃんとした答えをすることができません。

文永堂出版からご寄贈いただいたこの本は、Blackwellから出ていたHand-Rearing Birdsの訳本です。飼育法からリハビリ、野外復帰までを日本語で読める貴重な本です。かなり具体的に飼育法が書いてあるので、これがあ

れば、これからはある程度答えられそうです。実際にヒナを拾うことはなかなかないでしょうが、アマツバメのヒナは木箱の壁にしがみつけて育てるとか、なるほどなと思うような飼育方も載っています。高価な本ですが、傷病鳥の野外復帰などに興味のある方はぜひ、見てみると良いと思います。【植田睦之】



研究誌 Bird Research よい

1. カルガモの季節移動

第5巻の最初の論文が受理されました。關さんのカルガモの季節移動についての論文です。

關 義和. 2009. カルガモの季節移動について. Bird Research 5: S1-S5.

カルガモは本州以南では留鳥です。しかし留鳥といっても意外に季節的に移動しているものです。この論文は一年をとおしてカルガモの個体数をかぞえ、カルガモが季節的に移動していること、そしてその移動パターンが場所によって異なっていることを示したものです。ペランダバードウォッチの結果からも見えてきつつありますが、スズメやカラスといった身近な鳥たちも季節的に移動したり生態を変えたりしているよう



写真. 子育てするカルガモ。子育て、換羽、越冬などその時に必要な条件に応じて、留鳥も季節的に移動しているのかもしれない。[Photo by 内田博]

です。皆さんも観察の中、鳥たちの意外な側面を発見したら、ぜひ、まとめてみてください。

2. ご投稿お待ちしております！

Bird Researchは皆さんからの論文投稿でつくる研究雑誌です。投稿をお待ちしています。論文をはじめて書く人も大歓迎。論文ならではの書き方というものがあるので、最初は戸惑うこともありますが、論文を書くことは決して難しいことではありません。面白いデータや観察記録をお持ちの方は、お気軽に植田までご相談ください。

【植田睦之】

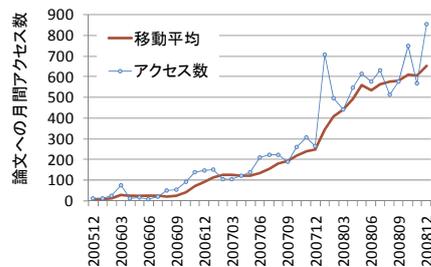


図. Bird Research誌の閲覧数の推移。年々閲覧者が増加しており、注目度が増しているのがわかる。

論文紹介

明るさで潜る深さを変えている？ ～ 夜中にも採食するカワウ～

空を飛んでいるカワウを良く見ていると、首をひねって川面を見ていることがあります。放流直後の群れているアユだと僕の眼からでさえ目立つので、カワウにとっても見つけやすい餌なのだと思います。このカワウですが、水中ではあまり視力が良くないそうです。といっても、僕らが視力検査でやるようなことではなくて、光に対する感受性が弱いということのようです。しかし、グリーンランドのカワウは夜にも採食することが、水深を記録することのできるデータロガーを使った研究で明らかになりました(Grémillet 2005)。グリーンランドでは真冬になるとほとんど太陽が昇らず、14時から翌朝の8時までは真っ暗になりますが、なんと、この時間帯にもカワウが潜水をしていたことを示す記録が複数の個体につけたロガーから得られたのです。



写真. 魚の群れを追って飛んで移動しつつ潜水するカワウ。

カワウは水中で視力に頼らずに魚を探して食べることができるのでしょうか？Whiteさんたちは、真冬のデータに着目して、夜明け最初の採食(薄明時)、その日2回目の採食(昼間)、一日の最後の採食(夜)に分けてデータロガーから潜水深度のデータを取り出して分析してみました。すると、昼間は平均12m、最大30mまで潜水するのに対して、夜では平均6m、最大でも15mと浅く、薄明時はその中間でした。そこで、Whiteさんたちはこの他にもいくつかのデータを検証したうえで、カワウは明るさによって潜水深度を変

えていることを示しています。そして、視力の弱さにもかかわらず、やはりカワウの採食行動にとって「見る」ということが一番重要だと言っています。しかし、夜、どうやって魚を捕まえているのか、その答えはこの研究でも明らかにされていません。おそらく、遠くから獲物を見つけるのではなく、海底などをくちばしで探って、見つけたら首を一気に伸ばして捕らえているのではないかと、Whiteさんたちは考えています。

また、明るさ以外にカワウの行動に影響を与えている要因として、魚の影響を考察しています。グリーンランドのカワウはギスカジカという岩礁地帯に生息する底生魚の仲間を主に採食していますが、この中の一種は、夜になると浅いところに移動してくるそうです。なので、それによってカワウの潜水深度の分布が決まっているのではないかという可能性です。さらに、潜水深度の頻度分布を詳しくみると、昼間と薄明時は、15～20mぐらいの深いところ以外にも数メートルの浅いところにもピークがある2山型でした。他にカワウが食べているもので多いのは、日本でもシシャモの代わりとして流通しているカラフトシシャモだそうです。浅いところのピークはこの魚を狙って潜水しているものなのかもしれません。日本のカワウも夜に採食することがあるのでしょうか？興味を惹かれる論文でした。【高木憲太郎】

● 引用文献

Grémillet, D., Kuntz, G., Gilbert, C., Woakes, A.J., Butler, P.J. & Le Maho, Y. 2005. Cormorants dive through the Polar night. Biol. Lett. 1: 469-471.
White, C.R., Butler, P.J., Grémillet, D. & Martin, G.R. 2008. Behavioural strategies of cormorants (Phalacrocoracidae) foraging under challenging light conditions. Ibis 150: 231-239.

ハクセキレイ 英: White Wagtail 学: *Motacilla alba*

1. 分類と形態

分類: スズメ目 セキレイ科

全長: 208mm (197-214)
 最大翼長: ♂96.58±0.55mm ♀89.93±0.89mm
 尾長: ♂98.30±0.50mm ♀92.29±2.46mm
 全嘴峰長: ♂17.70±0.17mm ♀17.49±0.17mm
 ふ蹠長: 24mm (22-26)
 体重: 30.4g (25.5-34.5)

※ 全長, ふ蹠長, 体重は榎本(1948), 他はHiguchi & Hirano (1983)の山階鳥類研究所収蔵標本の測定値と宇都宮市での捕獲個体に基づく。いずれも, 亜種ハクセキレイ。

羽色:

オスの繁殖羽では, 頭部から背, 尾羽, 喉から胸が黒く, 顔には黒くて細い過眼線がある。顔と腹は白い。メスの繁殖羽では頭部と胸, 尾が黒く, 背は明るい灰色, 腹は白い。オスの冬羽は, メスの繁殖羽に似るが, 背は灰黒色や黒まで変化に富んでいる。メスの冬羽の頭部は灰色になり前頭部が黒いことが多い。雌雄とも胸の黒斑は繁殖羽に比べて狭い。



写真1. 水辺で虫を啜る亜種ハクセキレイの雄。

鳴き声:

地鳴きはチチン, チチンと聞こえる。囀りは, 2パターンあり, チュビー, チュビアーと一声ずつ区切って鳴くシンプルなタイプ(図1-a)と, チチン, チチン, ジュイ, ジュイ, ジジジ, ジュイ…などと, だらだらと複雑に鳴くタイプ(図1-b)がある。シンプルな鳴き声は, アンテナの上や電線, ビルの屋上など目立つところに止まって鳴く。また, 秋冬期なども縄張り争いの際や侵入者が上空を通過したときにもこの声で鳴く。このことから, シンプルな鳴き声は, 縄張り誇示の機能があると思われる。一方, 複雑な鳴き声は, おもに春先に水辺など地上で採食中に鳴くことが多く, アンテナやビルの屋上など目立つところで鳴くことは少ない。また, この鳴き声は, ハシブトガラスなどが営巣地へ接近したときにモビングの際にも出す。複雑な鳴き声の機能についてはつがい形成などが考えられるが, 良くわかっていない。

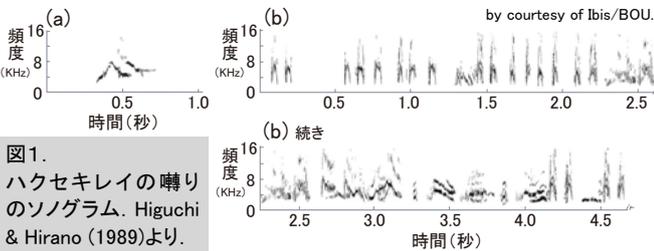


図1. ハクセキレイの囀りのソノグラム。Higuchi & Hirano (1989)より。

2. 分布と生息環境

分布:

ハクセキレイは, ユーラシア大陸からアフリカ大陸および北アメリカの一部に広く分布し, 9亜種に分類されている(Alstrom *et al.* 2003)。日本では, 亜種ハクセキレイ *M. a. lugens*, 亜種タイワンハクセキレイ *M. a. ocularis*, 亜種ホオジロハクセキレイ *M. a. leucopsis* の3亜種が記録されている(日本鳥類目録編集委員会 2000)。このうち亜種

ハクセキレイは, カムチャッカ半島からサハリン, ウスリー地方, 日本に分布する。

生息環境:

海岸から内陸の河川, 湖沼, 農耕地, 市街地, 工業団地と水辺ばかりでなく乾燥した開けた環境にも幅広く生息し, 繁殖している。

3. 生活史

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
繁殖システム:	非繁殖期		繁殖期				栃木県の例					

河川や農耕地に広く縄張りを構えて生活する。越冬期は1羽あるいは雌雄で縄張りを構えるが, 雌雄の結びつきは弱く, メスがオスの縄張りに「居候」する形である。3月下旬ごろからオスはさかんに目立つところで囀るようになり, 繁殖に入る。婚姻スタイルは一夫一妻である。栃木県宇都宮市の調査では, 1回目の繁殖は4月上旬から造巣がはじまり, 4月中旬に産卵, 5月下旬から6月上旬に巣立つ。その後, 2回目の繁殖に入るつがいもいる。

巣:

巣は, 橋げたや建築物, 看板の隙間に作られることが多い。巣材は, 枯れ草を外装材に使い, 内装材には獣毛や羽毛などを使う。造巣行動は雌雄で行なうが多くはメスが行なう。

卵:

卵は汚白色の地に褐色の斑点があり, 長径21.6mm (18.8-26), 短径16.1mm (15-17)。一腹卵数は4~5卵である(清棲 1978)。

抱卵・育雛期間:

抱卵は, 雌雄で交互に行なう。抱卵期間は約12~13日である。育雛は, 雌雄で行なう。



写真2. 街路樹で就囀するハクセキレイ。

ねぐら:

ハクセキレイは晩夏から翌春にかけて夜間に集団で就囀する。ねぐらは, 街路樹や橋げた, ビルの看板の陰などで, 秋口には電線なども利用する。多いときには数百羽が集まる。秋口の街路樹などでは, セグロセキレイも一緒に就囀することもあがるが, ほとんどの場合, ハクセキレイだけでねぐらを作る。

4. 食性と採食行動

食物は, カゲロウ類やトビケラ, アブ, ユスリカ, トンボなどの水性昆虫の幼虫や成虫, クモ類, 魚(稚魚)などである。採食方法は, 地上を歩きながらついでむことが多いが, 他に飛行中の昆虫を飛立って捕らえるフライキャッチングなども行なう。翼を使った採食方法は, 冬期より繁殖期に多い(表)。

表. ハクセキレイの時期ごとの採食方法。

採食方法	繁殖期 N=995	冬期 N=3287
歩行採食法	77.4%	92.7%
フライキャッチング法	13.2%	5.0%
掏り取り採食法	2.9%	2.3%
飛びつき採食法	6.5%	0%

Higuchi & Hirano 1983,1989 より

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 分布拡大とセグロセキレイとの種間関係

ハクセキレイは、1970年代以前には北海道や東北地方の北部で繁殖していたが、1970年代中ごろから、その繁殖分布を次第に南下させた。その結果、近縁なセグロセキレイとの繁殖分布が重複するようになり、両者の種間関係が注目されるようになった。さらに、同時期に亜種ホオジロハクセキレイが西日本で繁殖するようになり、ハクセキレイの各亜種の日本における繁殖分布の動向が注目されるようになった(樋口1984)。

亜種ハクセキレイは、栃木県宇都宮市では1976年ごろから繁殖するようになり、おもにセグロセキレイの繁殖密度が低い工業団地や市街地の河川沿い、ビル街などで繁殖し、セグロセキレイの密度の高い郊外の大河川などでは全く繁殖していなかった(樋口・平野1981, 平野1985)。

宇都宮市の市街地を流れる川幅約50mの田川では、セグロセキレイとハクセキレイの生息密度が高く、両種の環境利用や種間関係が調査された(Higuchi & Hirano 1983, 1989)。その結果、ハクセキレイとセグロセキレイは、冬期および繁殖期とも完全に重複した縄張りを構えていた(図2)。しかし、河川に対する依存度は、繁殖期と冬期とも、セグロセキレイに比べて低く、河川の利用時間は繁殖期では1時間あたり平均2.4分、冬期でも1時間あたりオスで平均30.3分、メスで平均36.7分しかなかった。したがって、ハクセキレイは、河川を行動圏の一部として利用するに過ぎなかった。また、地上で歩きながら採食する場合には、セグロセキレイより乾燥した場所をつつく頻度が有意に多かった。繁殖時期は、セグロセキレイより約1ヶ月から1ヶ月半遅く、囀りのピークも遅かった(図3)。このような、河川への依存度の違いや採食行動の違い、繁殖時期のずれなどによって、ハクセキレイは新たに分布を広げた地域で同所的に繁殖していると考えられた。

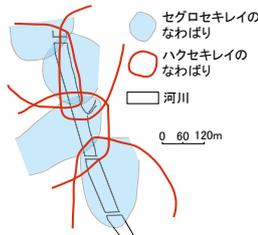


図2. 繁殖期における縄張り分布の1例。Higuchi & Hirano (1989)を基に描く。

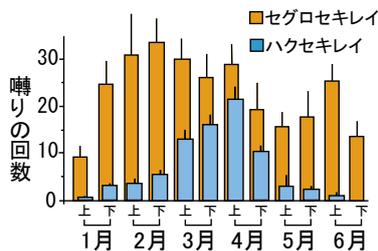


図3. ハクセキレイとセグロセキレイの囀り活動の季節変化。Higuchi & Hirano (1989)を基に描く。

● 繁殖分布および繁殖環境の変化

1984年と2004年の繁殖期に、宇都宮市の市街地を中心に136.25km²の範囲を500m四方の区画に分けてハクセキレイの生息分布と環境を調査した(平野1985, 2005)。その結果、1984年には、ハクセキレイは59区画で記録され、工業団地や住宅地、建物密集地で記録される割合が高く、大河川や農耕地ではほとんど記録されなかった。一方、2004年の繁殖期には、545区画のうち126区画(24.0%)で生息

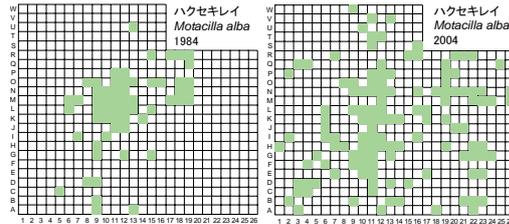


図4. 1984年と2004年における宇都宮市のハクセキレイの繁殖分布の比較。

が確認され、1984年と比較すると有意に分布が拡大した(図4)。しかも、2004年には工業団地や住宅密集地ばかりでなく、大河川や農耕地と1984年の調査ではほとんど記録されなかった環境にも生息しており、セグロセキレイの密度の高い場所でも繁殖するようになった。このような生息環境の拡大は、一つにはハクセキレイの繁殖個体数が増加したことで、それまで利用していなかった環境へ進出したことが考えられる。また、この20年間の宇都宮市の環境区分を比較すると、農耕地や丘陵が減少する一方で、住宅地や建物密集地が増加し、しかも、農耕地帯に郊外型の大規模店が著しく増加した。こうした郊外型の店舗には、看板や建物の隙間などハクセキレイの営巣場所が多く備わっている。営巣場所が増加したことで、農耕地へ繁殖分布を拡大したと考えられた。また、大河川への繁殖分布の拡大は、セグロセキレイが河川敷から離れた建物などを営巣場所に利用するようになり、セグロセキレイが河川の水辺を利用する時間が短くなったことが影響したと考えられた。

6. 引用・参考文献

Alstrom, P., Mild, K. & Zwitterstrom, B. 2003. Pipits & Wagtails of Europe, Asia and North America. Christopher Helm, London.
 榎本佳樹. 1941. 野鳥便覧. 日本野鳥の会大阪支部.
 樋口広芳. 1984. 白黒セキレイの世界. 野鳥 49:32-35.
 樋口広芳・平野敏明. 1981. 栃木県におけるハクセキレイ *Motacilla alba* の繁殖記録と繁殖環境. 鳥 29:121-128.
 Higuchi, H. & Hirano, T. 1983. Comparative ecology of White and Japanese Wagtails, *Motacilla alba* and *M. grandis*, in winter. Tori 32: 1-11.
 Higuchi, H. & Hirano, T. 1989. Breeding season, courtship behaviour, and territoriality of White and Japanese Wagtails *Motacilla alba* and *M. grandis*. Ibis: 578-588.
 平野敏明. 1985. 宇都宮市におけるセキレイ類3種の繁殖環境. Strix 4:1-8.
 平野敏明. 2005. 宇都宮市におけるセキレイ類3種の生息分布と生息環境の変化. Bird Research 1:A25-A32.
 清棲幸保. 1978. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑 I. 講談社, 東京.
 日本鳥類目録編集委員会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.

執筆者

平野敏明 バードリサーチ研究員

私がハクセキレイを追いかけたのはもう30年近く前になります。今、改めてハクセキレイをみると、彼らの生息状況も当時と比べると大分変わりました。また、ホオジロハクセキレイはどうなってしまったのでしょうか。機会があれば、バードリサーチで繁殖分布調査などをしてみようかと思っています。



学会情報

国際シギ・チドリ類研究会 大会参加報告

国際シギ・チドリ類研究会2008年大会に参加してきました。この会は正式にはInternational Wader Study Groupといい、シギ・チドリ類を研究する熱心なアマチュアとプロからなるフレンドリーな研究会です。2008年大会は、10月3～6日にポーランド北端のグダンスク郊外で開催され、18カ国から122人が参加しました。

私は関空から出発して10時間半ほどでフィンランドのヘルシンキに到着し、翌日に飛行機でバルト海を渡り一時間半ほどで対岸のグダンスク空港へ飛び、迎いのバスで海沿いの会場に到着しました。宿舎から幅200mほどの松林を抜けると、白い砂浜と灰色のバルト海が広がっていました。林の中でコオバシギの研究で有名なグローニンゲン大学のPiersma教授とお話できたのはうれしいことでした。



シギ・チドリの様々な発表

大会では、国立オランダ研究所のJutta Leyrerさん達による、過去30年間のカウントデータと気象データを利用した、コオバシギの渡りルートと風条件の解析など、最新技術を利用した発表の他、各地のアマチュア研究者が、渡りのパターンや体調(体重や脂肪の蓄積状態など)と換羽の関係など、標識調査の成果を発表されている姿が印象的でした。極東・アジア地域の発表では、モスクワ州立大学のMikhail Solovievさん達は、過去30年間にロシアでは、6月に30種、7月に16種が有意な気温の上昇にさらされており、特に極東地域で有意な上昇傾向を示す地点が多く、データが少ないもののシギ・チドリ類(ハマシギのsachalina亜種など)の繁殖個体数の減少との関連について言及していました。ポスター発表では、北京師範大学のYang Hongyanさん達による黄海のコオバシギの食性解析などがあり、私も日本のシギ・チドリ類の減少傾向について発表してきました。

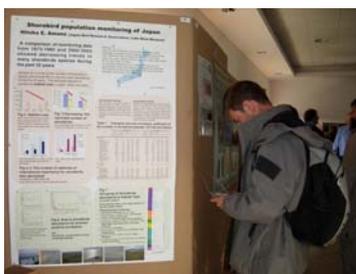


写真1. ポスター発表の様子。

捕獲技術やミュビシギのワークショップ

捕獲技術のワークショップでは、ウォーク・イン・トラップ(写真2)の展示もありました。砂浜などに設置しておく、シギ・チドリ類が自然にトラップに入るそうです。ミュビシギのワークショップでは、アフリカ南部の海岸線で個体数を数えあげた初期の研究や、越冬地のオランダ及びガーナの海岸での採食効率と渡り戦略に関する比較研究や、繁殖地のグリーンランド北東部におけるダブルクラッチ(最初の一腹卵はオスが育て、次の一腹卵はメスが育てる)の話題など多岐にわたっていました。



写真2. ウォーク・イン・トラップを囲んで。

懇親会とエクスカーショ

懇親会では、屋外でたき火を囲んでソーセージを焼いたり、ポーランドの音楽の演奏を聞いたりして楽しみました。トナカイの丸焼きも振る舞われました。エクスカーションではスウォヴィンスキー国立公園に行き、砂丘とバルト海、セグロカモメやカムリカイツブリなどを観察しました。



写真3. 懇親会で出されたトナカイの丸焼き。左下に頭が。

次回の年次大会は、2009年9月18～21日、ワッデン海に面したオランダのテクセル(テッセル)島で開催されます。開催地は多様な湿地と干潟が広がる場所で、ヨーロッパのバードウォッチャーの間で有名な探鳥地とのことです。

国際シギ・チドリ類研究会

国際シギ・チドリ類研究会の会員は、ヨーロッパの人が多いようですが、50か国以上450人を超えています。大会はヨーロッパで年1回開催され、「The Wader Study Group Bulletin」という学術誌が年3回刊行されています。ホームページ(<http://www.waderstudygroup.org/res/colourmark/index.html>)に詳しい情報があります。標識調査のページでは、オオソリハシギがオランダからスペインやポルトガル、さらにアフリカのセネガルへ渡る例が紹介されています。【天野一葉】